

## ●町民文化の伝統継承

日向市地方に「美々津で唄をうたうな」という言い伝えがある。

日向市・美々津は江戸時代初めから、京阪神へ日向の産物を積み出し、また京阪神からの交易船の寄港地としてにぎわった。物の流入と同時に京阪神で流行する唄も持ち込まれ、日時を置かずうたわれるようになった。このため、美々津以外の人がここで唄をうたうと、「今ごろあんな古い唄をうたって」と笑われたという。言い伝えはそのことから生まれたものであった。江戸時代から明治にかけて、美々津はさまざまにぎわいをみせた。その様子は「美々津千軒」という言葉で表され、「懂木（しゅもく）の町」として、金がなければ通れないといわれたほど。

今でも美々津の上町、中町、新町などには江戸時代末期の格子戸の家や古い町並みが残り、



美々津で和紙（手漉）と手すき和紙の技法で制作される伝統の手すき和紙

全国でも珍しい港の間屋街として、往時のにぎわいを伝えている。一九八六（昭和六十一）年には文化庁から重要伝統的建造物群保存地区に指定された。古くからの伝統行事も継承され、美々津で花開いた町民文化に触れようと、訪れる人も多い。

町並み保存地区から少し離れた石並川の下流、JR美々津駅の通りに、一軒の手すき和紙製作所がある。「日向地誌」によると、一八八四（明治十七）年に高松村（今の美々津町）に五十軒、幸脇村に六軒の紙すき業者がいた。その後、一九二七（昭和二）年にも十四軒あったという記録がある。しかし、現在は一軒残っているだけである。

美々津の手すき和紙づくりは、石並川と耳川によって入郷地区から「かじ」「こうぞ」「みつまた」などの和紙の原料が運ばれたことから盛

んになった。江戸時代の高鍋藩主・秋月氏の産業振興策としても奨励された。

文献「高鍋藩実録」によると、宝暦年間（一七五〇―一六三）に紙すき工を高鍋藩で抱え、文政時代（一八一六―一三〇）には藩の公用紙として美々津和紙を使用した。慶応二（一八六六）年には、美々津和紙三千枚を朝廷に献上したともある。また、一八八九（明治二十二年）にはパリで開かれた万国博覧会にも出品され、好評だった。

今、伝統を守るのは県の伝統工芸士、市の無形文化財でもある「みみつ手漉和紙」の佐々木寛次郎さん（六七）。後継者の二女、実穂さん（三三）と伝統の技に磨きをかけ、代々受け継がれてきた手作業で丹精こめて紙をすく。

甲斐 勝